

— 今晚は森繁久彌です —

涙をけとばせ

森繁久彌_他編

＝今晚は森繁久彌です＝

涙をけとばせ

森繁久彌_他編

文化放送出版部

涙をけとばせ

¥ 350

昭和42年 6月15日 第1刷発行◎
昭和42年 8月5日 第7刷発行

編 者 森 繁 久 彌 他

発 行 者 萱 原 宏 一

発 行 所 株式 文化放送
会社

東京都新宿区若葉 1-5
電話 東京 (357) 1111
振替 東京 101940

文化プリント 印刷・製本 落丁乱丁はお取りかえいたします

まえがき

一人の著者の書物には、それがどんなに優れたものであっても、どこかでひっかかることがある。それは当然のこととて、その人の心が私の心と全く重なり合うはずはないからだ。

この本が或る意味で素晴らしいのは、多くの著者によって出来上っていることだろう。そしてもう一ついうなら、それらの著者が揃って前向きで「生きる」という厳粛な事実に対決している、そのむれかえるような息づかいが伝わること。

髀肉の嘆をかこって今日の青年を云々する人に、ほんの数篇でいい、眼を通してもらいたい。その人は恐らく、新しい今日を、新しい日本の鼓動をそこに感じて、皮相の見解を恥じ入ることだろう。

一斉に若葉が枝にのび、大地の色が変ったような五月に、この本を世に送れたことを、私たちは何にもまして喜んでゐる。

昭和四十二年 初夏

森繁久彌

目次

まえがき……………森繁久彌

はじめに——手紙・手紙・手紙・手紙……………七

ぼくは紙屑屋……………二

オルゴール……………一四

受験生の死……………二四

就職列車……………二九

フトンよ……………三三

クソの臭さは飼い主の臭さ……………三八

星をみつめながら……………四一

ジロジロ見るな……………四五

一円募金……………五一

ヤサヒゲシリモさまへ……………	五四
奨学金をちゃんと返せ……………	五九
「死んでいく」仲間……………	六四
スイカとメロン……………	六七
洋服にも心がある……………	七一
建築機械製造の現場から……………	七五
ルールを守る二十二歳……………	七九
藤嶺学園三年B組の諸君へ……………	八五
ふと特攻隊を想い出した……………	八九
戦争と現代青年……………	九三
グッピンのカブ号……………	九九
となりあわせの人生……………	一〇八
牛乳しぼりの仲間から……………	一一二

我が家を建てる！……………一六

北海道の娘たち……………一一

「部落」という言葉……………一三

星とシヨン……………一五

ぐるぐるレター……………一四

街頭募金に立ってみて……………一八

青い空 白いおしめ……………一五

小関桂子さん……………一五

死は僕一人にまかせて下さい……………一七

若い根っこの会の加藤会長と語る……………一八

クリスマスに想う……………一五

キンタマあるのか……………一九

日韓水域に生きる……………一九

私はトラックにひかれました……………一九六

俺はファーマー・エコノミスト……………二〇二

「道」……………二〇六

ボタモチの想い出……………二二一

僕は家出をした……………二二五

自転車で日本一周……………二二九

潮を噴く青春……………二三二

鈴鹿山脈の郵便配達……………二三五

友よ、君一人だけ疲れ給うな……………二三九

番組がとりもつ縁で結婚!!……………二四三

若者たちとの集い——スタッフからの報告……………二四七

はじめに

——手紙・手紙・手紙・手紙——

毎日毎日、「今晩は森繁久彌です」の係宛、全国からたくさんのお手紙をいただきます。そのお手紙の山を見るたびに、日本の若者の心の交差点であり広場であるこの番組を持つ喜びをぼくはしみじみと噛みしめるんです。くやしいのは、それを全部紹介できないということ。時間が限られているから仕方がないといえはそれまでだけれど、ぼくとしては何とも残念で残念でならない。

それにしても、この番組が始まって以来今日までに、ずい分たくさんのお手紙を紹介してきました。更に、その人を核にして全国の仲間と仲間の間で交わされている手紙の数を考えてみると、これは実に変なものだと思う。しかも、その手紙は、ありきたりの手紙ではない。その手紙によって、ある仲間は、今まで閉されていた世界が急に開け、今までうつむいていた一人が空を見、もしかしたら、死を思いとどまった誰かがいるかもしれない。ぼくらのこの「たくさんのお手紙」がになっているものは実に重いな。

手紙

手紙・手紙・手紙・手紙

数えきれない手紙

郵便袋に詰めこまれ

汽車に曳かれて

北国の雪の原野を行く手紙は

流水も溶かす熱い心を伝えるために

海のまっ只中

一人ぼっちの島へ

小舟に乗って渡る手紙は

魂のかけ橋をかけるために

スモッグとクラクションの流れ漂う

都会のビルの谷間へ

まるで伝令のように

喘ぎ喘ぎたどりつく手紙は

負けるなと

ただその一言を届けるために

手紙・手紙・手紙・手紙

ぼくらの国を 北へ南へ東へ西へ

とび交うどっさりの魂よ

どっさりの灯よ

時には字の間違いもあったりするが

ひらがなばかりの便箋もあったりするが

ひたむきさの点では

ほかのどんな手紙にも負けない手紙たちだ

手紙たちは

すれちがいながら

すぐに仲間だと気がつき

やあと

挨拶を交わし合っているのではないか

ぼくは紙屑屋

神奈川県川崎市の浦野慶一君。今夜は君の手紙を読ませてもらいます。

「森繁さん、こんばんは。毎晩ごくろうさまです。

十時になると車の中にもぐりこんできいております。

僕の仕事は、製紙原料を扱うこと、つまり紙屑屋です。上京したのは今から四年前、商売人になる決心で上京しました。めしの食い方、箸の持ち方から教わり、毎朝五時に起こされました。思うのは国の親のことばかり。床に入ると涙、涙ばかりの毎日が過ぎました。ところが一年して、店が川崎に越してしまいました。今度は水のない電気のない生活。五百メートルも先にバケツかついで貰い水。ランプ生活三カ月。一ぱいの水で、顔、手、足を洗い、ランプのホヤを磨くという生活がつづきました。ある時は公園の片隅での仕事なので、まるでバタヤと同じようでした。いたい、そんなふうな苦しみなからの一生がずっとつづくのだろうか、と考えたり、いやいつか花が咲くだろうと考えたりして、自分自身が判らなくなることがあります。いたい、僕の存在価値ってあるのだろうか……いや、日本では六十パーセントは古紙でまかなっている現在、僕だって少しは役に立っているだろう、

と考え、がんばっています。

最後に、これは僕が働いている店のモットーなのですが、〈屑は扱っても人間は屑になるな〉をいつも念頭においています。

これから先、まだまだ苦しいことがあるでしょうが、一日一日を悔いのないようがんばろうと思っています。」

神奈川県川崎市生田四八八二 浦野 慶一

屑と名のつくもの——いろんなものがあるね。

ボロ、古綿、古新聞紙、古雑誌、紙屑、古カン、屑金、屑鉄、ゴム屑、空ビン、古樽、オガ屑、屑糸……。

屑と名のつくこれらのものも、しかし、それぞれ新らしく何度も生まれかわってわれわれ人間の用を勤めてくれる。屑糸は機械の油拭きになるばかりじゃない、屑糸織りといって、屑糸をつなぎ合わせて織り上げる織物だってあるくらい。

美味しいクズもあるね。

くず巻き、くず饅頭、くずせんべい、なんか——もっともこれは「クズ」の字が違うけれど。

ところが人間の屑だけはどうしようもない。

人間の屑、屑人間、心の中のものもしびを消してしまった人間、まっしぐらに目指す目当て、生きる目的というもののない人間。

考えることをやめてしまった人間。

ただ、食べてセックスを営んで寝るだけの人間。

感動を失った人間。

そういう人間は、屑鉄より下だ。空ビンよりもっとカラッポだ。古新聞紙よりもっと無意味だ。

浦野君は、屑を扱いながら、人間として一番大切なことを考えている。今の君の心の充実をいつまでも持ちつづけていって欲しいと思う。

そして、どえらい商売人になってくれ給え。

金をうんと儲けてくれ給え。君のような青年にこそ、うんと金を儲けて貰いたいと思うな。

浦野君今夜も車の中で聞いてくれているかな、いつも君の車と一緒にぼくの声が走っていると思うととても嬉しい。どうぞカーラジオによりしくお伝えのほどを。

オルゴール

その一

青森県北津軽郡の工藤輝代さんからのお便り。

「森繁さん今晩は。

私は高校二年生です。

今日、母といっしょにデパートへ買い物に行った時のことです。

デパートはちょうど大特売で、ふと目をやった売り場にはオルゴールがたくさんつまれてありました。

あまりの安さに私もつい足を止めオルゴールから流れ出る調べに聞き入っていた時のことでした。

まだ小学校の四、五年生にしか見えないような少年が、私の隣りに立っており、きれいな小箱のかわいいうるが、オルゴールを私の耳のところへ差し出し『ホラ禁じられた遊びだよ』と言うのです。

『ぼくこの曲が大好きなんだ、一度聞いた時から大好きなんだ』

といい、楽しそうにその曲を流しました。人なつっこい少年の笑顔にひきこまれ、私もなごやかな